

内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 地方創生総括官 唐澤剛氏

京都信用金庫 専務理事 榊田隆之氏

モデレーター：一般社団法人全国コミュニティ財団協会 会長 深尾 昌峰氏



※左から深尾昌峰氏、榊田隆之氏、唐澤剛氏

豊かな地域の未来に向けて

初日午後のパネル・ディスカッションでは、最初に内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局地方創生総括官の唐澤剛氏より、地方創生に係る国の取組みについて説明があった。さらにこの2月に公開された「平成29年度地方創生への取組状況に係るモニタリング調査結果」から、地域金融機関が地方創生においてどのような役割を担っているかのデータが示された。地域金融機関全体では空き家活用ローン等の金融商品の提供、地域企業等の海外進出支援、プロフェッショナル人材事業との連携等が多いこと、また地方創生関連の交付金に係る事業相談を受けた金融機関が増加しており、国の助成金がばらまきにならないようKPI管理をしていること、国の助成が終了した後も事業が継続できるようになるためには地域金融機関によるアドバイスが欠かせず今後も金融機関が本来業務としてコンサルティングを行うことが期待される、とのお話があった。

多様な人と人をつなぐ「場づくり」こそ地域金融機関の役割

つぎに榊田氏より、全国ではじめて「コミュニティ・バンク」を宣言した京都信用金庫の取組みの紹介があった。京都信用金庫はソーシャルとコミュニティをまさにミッションとして小規模事業者育成に取り組み、社会的インパクト投資の原点である融資と、志金を地域へ還元する投資という2つの金融スキームを通じ地域課題解決と豊かなコミュニティ形成につなぐことを大事にしている。モデレーターの深尾氏とともに設立した京都地域創造基金や祇園祭のクラウドファンディングの取組みを例に、資金の融通のみならず、リスクをとって社会課題の解決に取り組もうとする人々を社会全体でよってたかって応援する仕組みづくり、多様なバックグラウンドの人々をつなげる「場づくり」、「おせっかい」こそが、コミュニティ・バンクの役割であるとの話があった。

地域の皆でよってたかって仕組みづくりを行うこと

最後に今の地方創生の現場に足りないもの、課題についてモデレーターから投げかけがあり、榊田氏、唐澤氏からは閉塞感のある今の時代、社会課題解決型のベンチャー、イノベーションを生むことのできる人が重要。また、20世紀が効率性と同質性の時代であったのに対して、今後は多様性と高付加価値化が重要、いわばごちゃ混ぜの時代となるとのコメントがあった。深尾氏からは、健全な参加感を持った市民がローカルプライドを持って

皆でどう励まし合いながら地域経済のあり方を作っていくか。地域における社会的インパクト投資とは、資本家がぼろ儲けをするモデルではなく、お金が地域に戻っていく「地域」単位の社会経済ガバナンスではないか、とのコメントがあり締めくくられた。

以上